

『開迹顯本宗要集』における草木表現に関する一考察

渡部 憲 吾

一、問題の所在

日隆聖人（以下、隆師と称す）の草木成仏についての考えは本門弘経抄に散見されるが、その詳細は『開迹顯本宗要集』（これ以降、『宗要集』と称す）にまとめられている。『宗要集』雑部草木成仏の項目には草木成仏における様々な説明がなされ、草木成仏や草木という語句が多数回使用されている。この中に「草木」という語句を冠する用語がいくつか見られる。例えば「草木の信者」や「草木の衆生」である。信者や衆生は有情を指す言葉であると思われるが、なぜ「草木」という語句が付されているのであろうか。ここで「草木の信者」や「草木の衆生」を「草木表現」とよび、本稿では前記した二つの草木表現とはいったい何を示し、これが草木成仏あるいは衆生の成仏にどう関係しているか考察を行う。

なお本稿では昭和五十七年に日隆聖人御聖教刊行会より発行された『開迹顯本宗要集』第五巻を用いることとし、常用漢字を使用する。

二、「宗要集」について

『宗要集』については、株橋諦秀氏⁽¹⁾や大平宏龍氏⁽²⁾の報告がある他、昭和五十七年に日隆聖人御聖教刊行会より発行された『開迹顕本宗要集』第五卷の巻末には株橋日涌氏の解説⁽³⁾が掲載されている。これらによれば『宗要集』は天台家に伝わる『政海類聚鈔』の算題について之を開迹顕本し本宗の意をもって解説されたものであるとされる。また草木成仏の項においては、『政海類聚鈔』の算題の後に続いて当宗における草木成仏についての質疑応答がなされる。述作年代については享徳二年（一四五三）八月下旬から康正二年（一四五六）十一月にいたる約三年四か月にわたると考えられている。

三、草木表現が確認できる箇所とその特徴

以下に草木表現が確認できる箇所と、その前後の部分を以下に示す。草木表現が確認できる部分には、便宜的に傍線を付した。

○「草木の信者」

顕本事円の三千は、玄の七の本の十妙の本因・本果・本国土妙の依正互具三千遍法界の当体蓮華の妙法の事三千なり。此の時、三千の十界の中の果頭の仏界、久遠本仏大王なりと顕れて塵々法々無作三身なり。此の無作三身の釈尊上行、久遠より已来、此の娑婆同居を以て本国土妙の王城と為し、依正不二して本国土妙の

土地草木即積尊上行、積尊上行即土地草木なり。經に我見^レ積迦如来^ヲ於^テ無量劫^ニ難行苦行^ヲ積^レ功^ヲ累^レ徳^ヲ求^ムコト菩薩ノ道^ヲ未^ダ曾^テ止息^シタマハ、觀^ルニ三千大千世界^ヲ乃至無^レ有^ルコト如^キモ芥子許^ヲ非^ヤコト是^レ菩薩ノ捨^ル身命^ニ勉^ム云々。此の文は久遠劫より此の娑婆界の依正草木悉く積尊の色心なりと云う文なり。是れ豈に土地草木即積尊にあらずや。故に寿量品に我^モ亦^モ為^レ世ノ父と云う世とは、此の娑婆三界の土地草木の父と云うことなり。是れ又、草木成仏の旨明鏡なり。此の如き本因本果本土の依正整足の顕本の事三千の本地妙法蓮華經を顯す時、眞実の草木成仏は顯るるなり。故に宝塔品の多宝の善哉善哉は非情の草木成仏の遠序なり。本門八品上行要付は草木成仏の積尊、草木成仏の所覺の三千妙法を以て草木の因行の上行に之を付するは、滅後草木の信者に授与せしめん為なり。故に滅後の仏菩薩の画像・木像の開眼供養は本門八品上行付囑の本尊に限るべきものなり。

○「草木の衆生」

此等諸御抄の肝心は觀心本尊抄・開目抄の本因本果本土の事三千の上の草木成仏なり。尔前・迹門に未だ顯れざる本因本果の久遠の報仏と本国土妙と顯れて能居・所居互具の事三千初めて顯れ先代未聞の草木成仏の積尊上行顯れて草木成仏の本仏積尊、草木成仏の本地妙法蓮華經の本尊を以て草木国土成仏の從地涌出の上行に付して滅後依正不二の草木の衆生を益す。既に土地草木と久成の本因本果報中論三の無作三身と依正不二の成仏なる故に、三千依正の塵々法々に本因本果の当体蓮華の妙法を具す。故に草木獨立に己々の草木に本因妙を具すれば、草木に事の發心修行これあり。又草木に本果妙を具すれば成仏これあり。是れ草木の自依心の獨立の成仏なり。故に積尊も久遠本行菩薩道の時は此の界の本国土妙の大地より涌出したもう。故に提婆品の觀三千大千世界已下の文の如く、積尊の御身は草木土地なり。元より上行等の四菩薩は從地涌出

する故に、法界土地の地水火風即上行等の四菩薩なり。⁽⁵⁾

以上のように二つの草木表現の当該箇所を示した。これら草木表現が確認できる箇所の特徴としてそもそも算題に共通点がみられる。「草木の信者」については『政海類聚鈔』の質問、「問ふ、何なる教理に依て草木成仏の義を立つるや。」に対し、尔前経、法華経迹門、法華経本門における草木成仏が対説されている。また「草木の衆生」についても当宗の質問「尔前・迹門・本門の草木成仏のこと。」に対し、ここでも先の算題と同様に尔前経、迹門、本門の草木成仏を対説しているのである。このように二つの草木表現は尔前経、迹門、本門の草木成仏が比較される部分で見られるという共通点がある。次に依正不二の語やそれに類似する語が草木表現の前後に見られる点が共通点として挙げられる。さらに「草木の信者」、「草木の衆生」については本仏釈尊から上行菩薩への上行付嘱が行われる箇所に見られる。以上、三つが特徴として挙げられる。これら三つの特徴について考察を行う。

四、特徴についての検証

(一) 尔前経、迹門、本門における草木成仏

今回焦点を当てた二つの草木表現は尔前経、法華経迹門、法華経本門の草木成仏が比較される部分の法華経本門の説明の中に見られた。

尔前経の草木成仏については諸部の円教において法開会を明かす故に、仏の意に約せば依正不二の理を明かす

時に草木成仏の義を明かすという。例えば『中陰経』の、

一仏成道。親見法界。草木国土。悉皆成道。身長丈六。光明遍照。其仏皆名。妙覚如来。⁽⁶⁾

がこれにあたりと考えられる。ただし隆師は、

十界の依正互融の界如三千を明かさざる間、但為⁽⁷⁾次第第三諦所撰⁽⁷⁾の別門の意と成る故、有名無実の草木成仏なり。⁽⁷⁾

と示し、また、

法身如来と約する故、成仏をば明かすと雖も発心修行はこれなしと云うなり。⁽⁸⁾

として、尔前諸経の草木成仏を破している。尔前経の草木成仏が破された後、法華経迹門における草木成仏の説明がなされている。『政海類聚鈔』の質問に対する迹門の答えの冒頭部分では、

今経迹門には人法共に開顕して諸乘一仏乗と会する故に、十界依正三千の万法・森羅草木国土までも色香中道して依正塵々悉く彼々三千互遍亦尔して百界三乘俱空假中する故に、界如三千依正の色心に三千三觀円備して、草木国土に身口意の三密を備え三業相應の無始法尔の即身成仏了々なり。⁽⁹⁾

と示され、また当宗の質問に対する迹門の答えの冒頭では、

諸法実相・十如因果・世間相常住と説いて開権顕実を明し、一念三千を明し、草木成仏を明すと云えども、法身常住・報応無常の義は尔前と全同なり。⁽¹⁰⁾

というように法華経迹門では一応、諸法実相、十如因果に基づく理の一念三千が明かされることを示し、これが十界の依正に備わっていることから草木成仏を説明している。しかしながら隆師は、

迹門の一念三千は、三千の中の十界、十界の中の仏界・果頭未開にして別門を帶する故に、始覚土民の仏界

にして仏界も定らず、又陰・生・土の中の本国土妙も顕れず、故に三千整足せず。既に三千の中の肝心たる
仏界と国土世間と定らずして、水中の月の如く、根なし草の波上に浮べるが如し。

と述べられており、迹門で明かされる理の一念三千は十界の中の仏界が始覺土民のインド出現の釈尊であつて、
その教化は有始有終であるため仏界も無常である。このため仏界も定まらず、さらに迹門ではその所住の国土も
示されていないことを指摘する。一念三千を構成する十界のうち仏界が定まっておらず、衆生のよりどころとな
る国土が示されていないことで依正互融も名ばかりとなってしまう。このような一念三千を根拠としては、成仏
は不確かなものとなる。次に法華經本門の草木成仏については、

此の時、三千の十界の中の果頭の仏界、久遠報仏大王なりと顯れて塵々法々無作三身なり。此の無作三身の
釈尊上行、久遠より已来、此の娑婆同居を以て本国土妙の王城と為し、依正不二して本国土妙の土地草木即
釈尊上行、釈尊上行即土地草木なり。

とし、久遠の本仏、そして所住の国土である娑婆を本国土と明かしている。そのうち本仏が遍於法界し本因本果
本国土依正互融の事の一念三千を明かし、この本仏釈尊の色心たる事具三千仏種が依正に備わっていると示され
る。經文には、

我見^ニ上レハ^レ釈迦如来^ニ於^テ無量劫^ニ難行苦行^ヲ積^ミ功^ヲ累^シ徳^ヲ求^ムルコト^ト菩薩^ノ道^ヲ未^ダ曾^テ止息^シクマハ、
至無^レ有^ルコト^ト如^キ芥子許^リ非^チ小^キコト^ト是^レ菩薩^ノ捨^リ身命^ヲ殉^リ云々

とある。本仏釈尊が久遠劫にわたる修行によつて理法を証得し内証の法とし、本仏の大慈大悲によつて十界依正
万法に具現莊嚴された事具三千仏種による草木成仏が示されている。

以上のように尔前經、法華經迹門、法華經本門の草木成仏を一念三千の成立の可否で判断しているのがわかる。

尔前経では一念三千そのものが説かれていないことを明示し、迹門では一応、一念三千が説かれているとするが仏界も定まらず、国土も明かされていないことから一念三千が成立しないとされ、本門に至って、本仏が開顕され、本国土が明らかになることで草木成仏も確かなものと説明される。以上のように段階を踏みながらも、一念三千という一つの基準で一つ一つの説を判別していくことによつて事具三千の成立を強調する意図が伺える。

(二) 依正不二

次に二つの草木表現に共通する点として依正不二が挙げられる。法華経迹門に見られる依正不二については、諸法実相理による理の一念三千を構成する依正不二であり、これに対して「草木の信者」、「草木の衆生」の前後にみられる法華経本門の依正不二は本因本果本国土依正互融の事具三千を構成する依正不二である。二つの一念三千を構成する条件の一つである依正不二の後にみられるのが、依正不二の上の正報と依報の二つの視点で十界の依正をみるというものである。法華経迹門についていえば、

諸法実相の十境界如本理三千の依正不二・色心一体の旨顕れぬれば、正報の方より十界依正を見れば依報の国土草木も隔てなく正報の成仏と成て草木が釈尊と云はれ、三五七九の三周声聞と云はるるなり。又依報の方より十界依正を照見すれば、十界の正報も国土草木と成る間、釈尊即草木成仏の教主なり、三五七九の三周声聞も草木成仏なり。

である。これと同様の表現と考えられる部分をあたると、

一念三千を明し、五陰世間・衆生世間・国土世間の依正互具して十境界如の三千、草木瓦石に周遍遍照して十如の色心因果の功德を悉く具足して草木即衆生、衆生即草木なり。

という部分が挙げられる。前者とは異なり、後者は正報、依報の視点という明確なものではないが、草木と衆生の立場を置換しているところから依正二つの視点があることが示唆される。

一方、法華経本門の中に見られる「草木の信者」の前の、

顕本事円の三千は、玄の七の本の十妙の本因・本果・本国土妙の依正互具三千遍法界の当体蓮華の妙法之事三千なり。此の時、三千の十界の中の果頭の仏界、久遠本仏大王なりと顕れて塵々法々無作三身なり。この無作三身の積尊上行、久遠より已来、此の娑婆同居を以て本国土妙の王城と為し、依正不二して本国土妙の土地草木即積尊上行、積尊上行即土地草木なり。¹⁶⁾

という部分には、先ほど挙げた例と同様に土地草木と積尊上行を入れ替えた関係が示されていることから二つの視点があることが示唆される。正報と依報という二つの立場が明示される部分としては、

此の本因果国依正三千の中の本因本果は衆生世間・五陰世間なり、本国土妙は国土世間なり。此の久遠本地の依正の三世間一体不二にして、依_レ即_テ是_レ正、正_ハ即_テ是_レ依なる故に、依正不二の正報の方より照見すれば、本因本果十界久遠の本身は積尊上行なり。又依正不二の本国土妙の依報の方より照見すれば、本果の積尊・本因の上行九法界も本国土妙の土地草木本来所具の当体蓮華の妙法の自受法楽の本因妙名字信行の初発菩提心の土地草木の地水火風、上行等の四菩薩なり。¹⁷⁾

や、

此の十法界を本国土妙に合すれば十界・十如の界如依正の三千を正報の方より之を論ぜば正報の積尊上行の自覚覚他・三世益物の化道の始終・種熟脱なり。又、依正不二の依報の方より照見すれば積尊上行の全体土地草木の仏にして、自覚覚他・従本垂迹の化道の始終・種熟脱なり。¹⁸⁾

という、二ヶ所が確認できる。

隆師は迹門で説かれる一念三千の構成要素について、

方便品の十如三千は第十仏界の果頭未開の故に別門を帶し、又本国土妙顕れざる故に百界千如・陰生二世間の互融ばかり顕れたる間⁽¹⁹⁾

と示される。迹門において一念三千が明かされ、これを根拠として草木成仏が説かれるが一念三千を構成する十界のうち仏界が定まっておらず、また本国土妙も明かされていないため、三世間の互融ではなく陰生二世間の互融までしか明かされていない。従つて有情界の成仏しか保証されていないのである。理の一念三千仏性を根拠とする草木成仏において依報たる草木は正報の成仏に従属する形でしか成仏しえないのである。先ほど示した依正二つの視点のうち依報の視点は、その成仏が不確かなため、その視座も不確かなものとなり成立しないものと考えられる。つまり仏性を本具しているという点では依正不二の関係は成立するが、正報の成仏と依報の成仏を考えたときに依報の成仏が独自且つ正報との關係性を有するものではなく、正報の成仏に従属する形で成立するものであるから依正不二とはいえないと考えられる。

これに対し本門の依正不二の根拠は本因本果本国土依正互融の事具三千仏種を具足していることである。迹門では不定であった仏界の常住性は本仏釈尊の開顯によつて明確となり、それにもない本国土妙も明らかとなり、事具三千仏種が依正にわたる成仏の種と成りえたのである。この仏種を依正二報に具足せしめられたことが前提となつて成り立つ依正不二が本門における草木成仏の原理となつていのである。本門の草木成仏は特に本国土妙の上で展開される。その文を挙げれば、

依正不二して本国土妙の土地草木即釈尊上行、釈尊上行即土地草木なり。⁽²⁰⁾

や、

依正不二の本国土妙の依報の方より照見すれば⁽²¹⁾
また、

此の十法界を本国土妙に合すれば十界・十如の界如依正の三千を正報の方より之を論ぜば⁽²²⁾
などの箇所である。また本国土妙の上での本仏釈尊と草木との関係について隆師は、

釈尊と本国土妙の三界依正の草木と久遠より父子天性を結ぶ故に、久成の釈尊上行は依正不二の能生の父なり、而今此処の三界依正の諸法は依正不二の所生の子なり。⁽²³⁾

と示されており、本仏釈尊と衆生・草木とは、本仏の遍於法界によつて具足された仏種を介した父子天性の関係を有しているといえる。

以上のような前提で正報と依報の立場が明確となり、一つの事柄を見ていくというのが依正二つの視点である。例えば先に示した、

依正不二の正報の方より照見すれば、本因本果十界久遠の本身は釈尊上行なり。又依正不二の本国土妙の依報の方より照見すれば、本果の釈尊・本因の上行九法界も本国土妙の土地草木本来所具の当体蓮華の妙法の自受法樂の本因妙名字信行の初發菩提心の土地草木の地水火風、上行等の四菩薩なり。⁽²⁴⁾

とは、本因本果の十界の実体とは何なのかを正報と依報の二つの視点で見るといふものである。十界の実体を正報の立場から見れば、久遠成道を契機とする本仏釈尊の遍於法界によつて事具三千仏種である釈尊の色心・因果が方法に具足される故、その具足された本体そのものも釈尊上行といえる。これを依報の立場から言えば、十界は本国土妙の上の土地草木であつて事具三千仏種を具足することは、土地草木を初めとする依正万法を構成する

四大（火大・風大・水大・地大）が即ち上行などの四大菩薩であることを示している。⁽²⁵⁾ また、別の箇所では、

依正不二の正報の方より照見すれば正報の尊形の上行要付なり、又依正一如の依報の方より見れば土地の仏の釈尊、草木の菩薩の上行に土地草木本具の蓮華の妙法を草木に付する以要言之なり。⁽²⁶⁾

とあり、上行付嘱について依正二つの視点が示されている。正報については正報の尊形の本仏から上行等の四菩薩への付嘱であるのに対し、依報については土地の仏から草木の上行菩薩への要法付嘱である。表現は異なるが示される内容は依正ともに同様であるといえる。

正報と依報の二つの視点を有している表現を宗祖遺文から探すと、例えば『四條金吾釈迦仏供養事』には、

一念三千の法門と申は三種の世間よりをこれり。三種の世間と申は一には衆生世間・二には五陰世間・三には国土世間なり。前の二は且く置之、第三の国土世間と申は草木世間なり。草木世間と申は五色の葱（絵）のぐ（具）は草木なり、画像これより起る。木と申は木像是より出来ず。此画木に魂魄と申神を入るる事は法華経の力なり。天台大師のさとり也。此法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ、画木にて申せば草木成仏と申なり。⁽²⁷⁾

という形で示されている。ここでの一念三千の法門とは三種世間の成立を重視していると見られるため、事の一念三千であると考えられる。一つの法門について依正二方面からみれば正報については即身成仏であり依報については草木成仏とよばれると示されている。宗祖においてもやはり事具三千の成立があつて、初めて示される見方であると考えられる。寺塔や木像本尊などの開眼供養について隆師は、

唯だ偏えに末代の開眼供養をば、釈尊・上行、本時の娑婆、依正合論の本門の一念三千をもつて、寺塔本尊の供養を致すべきなり。元より、寺塔並びに木像本尊と云うも、本時の娑婆の本国土より生長し、釈尊・上

行の御身より、生い出でたる、諸法実相の草木をもつてこれを造る。故に本門上行要付の三千の妙法をもつて、開眼供養を致せば、境智相応して、行者の本門の円心をもつて、久遠の娑婆草木所造の寺塔木仏の眼神に入るは、依・正、心・境、冥一にして、本門久成の寺塔と成るべきなり。⁽²⁸⁾

画像や木像とは国土世間からできる絵の具や木から造られている。この材料は事具三千仏種、釈尊の因果が具足されている国土世間つまり本国土から生長するものであるから、草や木にも仏種が具足されているのだから、これらから作られる画像、木像並びに寺塔にも仏種が具わっているのである。事の一念三千仏種を具足していることを前提とし、依正二つの視点のうちの依報からの見方であるといえる。

ここまでで、「草木の信者」、「草木の衆生」という草木表現は事具三千の成立、そして仏種を具足していることから正報と依報の二つの視点が確立し、そのうちの依報の視点で一つのものを見たときに見られる表現であるといえる。

(三) 上行付囑・末法下種

改めて「草木の信者」、「草木の衆生」の表現の前部をみると、

本門八品上行要付は草木成仏の釈尊、草木成仏の所覺の三千妙法を以て草木の因行の上行に之を付するは、減後草木の信者に授与せしめん為なり。⁽²⁹⁾

や、

尔前・迹門に未だ顕れざる本因本果の久遠の報仏と本国土妙と顕れて能居・所居互具の事三千初めて顕れ先代未聞の草木成仏の釈尊上行顕れて草木成仏の本仏釈尊、草木成仏の本地妙法蓮華経の本尊を以て草木国土

成仏の從地涌出の上行に付して滅後依正不二の草木の衆生を益す。⁽³⁰⁾

という本仏釈尊から上行菩薩への付嘱がみられる。当然のことながら、法華經迹門の草木成仏を説明する部分には上行付嘱の文は見られない。

上行付嘱について宗祖は、

此時地涌菩薩始^テ出現^セ世^ニ但^ニ以^テ妙法蓮華經^ノ五字^ヲ令^レ服^セ幼稚^ニ。

と『本尊抄』で示されている。「此時」とはこの前文で「今末法初」とあり、このことから「幼稚」とは末法の衆生を指すといえる。上行付嘱とは妙法蓮華經の五字、つまり総名妙法蓮華經を本仏釈尊から上行に付嘱されることに加えて、その後に必ず滅後末法の衆生に対する下種という行為が要求されている。この下種される対象が幼稚、つまり末法の衆生である。ここで問題とした「草木の信者」、「草木の衆生」という表現は上行付嘱された総名妙法蓮華經による末法下種の対象として登場していた。

以上から草木表現が見られる条件として事具三千仏種が具足されているということだけでなく、末法という時代や本仏釈尊の遍於法界によつて具足された仏種を開発すること、末法下種による総名妙法蓮華經の修徳の下種成仏という後段が想定されて、はじめて見られる表現であると考えられる。

(四) 草木表現の有無

前項で示した上行付嘱の文の他に同様の表現がみられる部分が数箇所ある。その中で上行付嘱の文が見られるのに、その下種を被る側の記載がないものが見られる。これについて末法下種をうける「草木の信者」、「草木の衆生」、あるいは末代我等⁽³²⁾という記載があるものは、いずれも尔前、迹門、本門、あるいは迹門と本門を比較し

ている部分であった。一方で上行付嘱の文があつても末法下種を被る側の記載がないものは、本門の草木成仏のみ説かれる部分で確認された。末法下種を被る側の記載の有無に関わらず上行付嘱の文があるものについて共通する点として、木画本尊の開眼供養に関連した記述があることが挙げられる。今、一々にその文を挙げる。まずは、

本門八品上行要付は草木成仏の釈尊、草木成仏の所覚の三千妙法を以て草木の因行の上行に之を付するは、滅後草木の信者に授与せしめん為なり。⁽³³⁾

についてであるが、「草木の信者」という下種の対象となる存在が示され、そのすぐ後に、

故に滅後の仏菩薩の画像・木像の開眼供養は本門八品上行付嘱の本尊に限るべきものなり。⁽³⁴⁾
という木像・画像の開眼供養に関する記述が見られる。また同様に、

尔前・迹門に未だ顕れざる本因本果の久遠の報仏と本国土妙と顕れて能居・所居互具の事三千初めて顕れ先代未聞の草木成仏の釈尊上行顕れて草木成仏の本仏釈尊、草木成仏の本地妙法蓮華経の本尊を以て草木国土成仏の従地涌出の上行に付して滅後依正不二の草木の衆生を益す。⁽³⁵⁾

とある。以上のように「草木の衆生」が末法下種の対象として登場した後、

故に涌出品の初めに仏滅後の木画二像の開眼供養の本尊と唱導とをば止善男子等と云て前三後三の六釈の意を以て迹仏・迹化・他方には付せず、上行等ばかりに付するなり。(中略) 以要言之の要法は草木成仏の本尊にして滅後の木画二像開眼供養の本尊と云うこと、疑いなきものなり。⁽³⁶⁾

と示され、以要言之の要法たる総名妙法蓮華経が草木成仏の本尊であり、木画二像を開眼供養する唯一のものであることが示される。また、『政海類聚鈔』の算題中の「草木成仏とは、事に発心修行して成仏すと云うか」の

回答に、

草木の発心修行の釈尊・上行、草木成仏の本尊の妙法蓮華経を顕本して、仏滅後の画像・木像の開眼供養の本尊の為に、涌出品の初めに草木仏の釈尊、草木成仏の本尊の三大秘法を以て草木の発心修行の上行菩薩に付す。⁽³⁷⁾

として、滅後における木像・画像の開眼供養し、本尊と為すために三大秘法、即ち総名妙法蓮華経を上行に付嘱したことが示されている。この後に、

此の土地草木の事の発心修行の以要言之の本尊を末代我等、此れを受持等、三業に経て之を行ぜば、我等の五大即上行等の四菩薩にして、我等が発心修行は即ち草木の事の発心修行なり。⁽³⁸⁾

というように、「草木表現」ではないが末法の衆生を表わすと考えられる末代我等という表現が示されている。文中の「我等の五大」とは、前述した火大・風大・水大・地大に空大を加えた五大であり、空大は四大に亘る⁽³⁹⁾ため四大菩薩の所表をそのまま四大に配されていると考えられる。

また、当宗の質問「草木成仏とは、草木は久遠成道を唱うるか。」の回答に、

草木・非情の多宝、善哉善哉と説法して草木所具の心法の釈尊、涌出品の時、土地の仏たる上行を召して依報所具の当体蓮華を以て之に付し、寿命品に至て草木所具の心法の釈尊の久遠成道を顕す。⁽⁴⁰⁾

として、上行付嘱の文が見られ、

此の故に仏滅後の木絵の開眼供養は本門に限るべきものなり。⁽⁴¹⁾

という文が続いている。また「本門八品の会場に草木に要法を付するや。」の回答にも、

依正不二の正報の方より照見すれば正報の尊形の上行要付なり、又依正一如の依報の方より見れば土地の仏

の釈尊、草木の菩薩の上行に土地草木本具の蓮華の妙法を草木に付する以要言之なり。⁽⁴²⁾
という上行付嘱の文がみられ、

本門八品上行要付の本門の本尊ばかり仏滅後の木絵二像の開眼供養をすべきなり。⁽⁴³⁾

というように、木絵二像の開眼は本門の本尊つまり、先にも示した総名妙法蓮華經に限ることが示されている。以上のように、上行付嘱の文が確認できる部分では木絵二像の開眼供養についても示されている。つまり、『宗要集』雑部の草木成仏の項目における上行付嘱の教義は、木画二像の開眼供養に特に関連付けられていると考えられる。上行に付嘱された総名妙法蓮華經を草木自身が開法下種することによって木画二像の開眼供養が可能になる。ここでは上行付嘱された総名妙法蓮華經によって木画二像を開眼供養する意が強調されているといえる。隆師は、滅後における木画二像について、

此の本門は大悲深重にして、在世より滅後を以て正と為す（中略）滅後の衆生をば本因本果の有情界の仏菩薩を以て裏となし、本国土妙を以て面と為し、本因果国の事三千の妙法より土地・草木・絵像・木像の釈尊・上行・不輕・日蓮大士を開出して本尊と為し弘経折伏せしむる時、木絵の釈尊・上行・不輕に神あり心ありて冥顕に罰を与え利生を与え、信者を仏に成し、謗者を墮獄せしむる等は、草木成仏の本尊の滅後流通の折伏の利生なり。⁽⁴⁴⁾

と示しており、滅後の衆生にとっての草木成仏した木絵二像の本尊の必要性を挙げている。木画二像が私たち末法の衆生にとっての本尊となり、これを信仰するという草木と末法の衆生との関係性が見られる。この関係によって出てくる表現が「草木の信者」や「草木の衆生」という草木表現であると考えられる。尔前経、法華経迹門、法華経本門の草木成仏を比較する算題の回答に見られる草木表現は、他経との差異を明確にする為に上行付

囑や末法下種という教義を強調する側面の他に、依報と正報に共通する仏種を開発する要法である総名妙法蓮華經を介して、草木国土から作られた木画の本尊を信仰して成仏に至る衆生ということが意識された表現であると考えられる。

まとめ

「草木の信者」、「草木の衆生」という草木表現が現れる大前提として、事具三千仏種が具足されていることが挙げられる。事具三千仏種が正報、依報ともに具足していることで本仏との父子天性が結ばれ依正不二の依報と正報の二つの視点が明かされるのである。かくして、この依正二つの視点のうち、依報の視点で本仏から付囑を受けた本化上行等からの末法下種を被る衆生を見たときに草木表現がみられると考えられた。一方で、上行付囑の文がありながら、草木表現がみられない箇所も散見された。その箇所は特に本門の草木成仏のみ説かれている部分であり、そこでは上行付囑と木画二像の開眼供養とが合わせて説かれていた。このことは上行に付囑された総名妙法蓮華經が滅後において木画二像を開眼供養し本尊と成しうるものであることが強調され、また、その本尊の有意性を示しているものと考えられる。上行付囑と草木表現が両方確認できた箇所においても木画二像の開眼供養に関する記述がみられ、前述した上行に付囑された要法の重要性を示している。草木表現はこの開眼供養された本尊を信仰して仏になる衆生という意図が意識された表現であると考えられた。

本稿では『宗要集』雑部の草木成仏の項目に見られる「草木の信者」、「草木の衆生」という草木表現を手掛かりに、草木成仏と私たち末法の衆生との関係性を考察したが、この草木表現が隆師の他の御聖教に見られるかど

うかは不明である。今後は他の著述において同様の表現を探すとともに、草木表現を手掛かりに陸師の教義の形成過程でいつごろ見られる表現であるかを確認していきたい。

註

- (1) 株橋諱秀稿「日隆聖人教学の序説」(『桂林学叢』第四号所収)。
- (2) 大平宏龍稿「開述顯本宗要集」考」(『興隆学林紀要』第三号所収)。
- (3) 『開述顯本宗要集』(以下、『宗要集』)第五卷卷末
- (4) 『宗要集』第五卷三五九頁。
- (5) 『宗要集』第五卷三七五頁。
- (6) 『大日本仏教全書』一七卷一九頁上。
- (7) 『宗要集』第五卷三五五頁。
- (8) 『宗要集』第五卷三七三頁。
- (9) 『宗要集』第五卷三五五・三五六頁。
- (10) 『宗要集』第五卷二七三頁。
- (11) 『宗要集』第五卷三五八頁。
- (12) 『宗要集』第五卷三五九頁。
- (13) 『宗要集』第五卷三五九頁。

- (14) 『宗要集』 第五卷三五六頁。
- (15) 『宗要集』 第五卷三五八頁。
- (16) 『宗要集』 第五卷三五九頁。
- (17) 『宗要集』 第五卷三六三頁。
- (18) 『宗要集』 第五卷三七八頁。
- (19) 『宗要集』 第五卷三六六頁。
- (20) 『宗要集』 第五卷三五九頁。
- (21) 『宗要集』 第五卷三六三頁。
- (22) 『宗要集』 第五卷三七八頁。
- (23) 『宗要集』 第五卷三七六頁。
- (24) 『宗要集』 第五卷三六三頁。
- (25) 四大菩薩を四大に配する仕方、およびその解釈については株橋日涌著『観心本尊鈔講義』上巻六七一・六七四頁、平島盛龍稿「性徳下種における色心二法・隆師と朝師の比較」(『興隆学林紀要』第九号所収)を参考にした。
- (26) 『宗要集』 第五卷二七九頁。
- (27) 『四條金吾釈迦仏供養事』(『定本遺文』一一八三頁)。
- (28) 『四帖抄』(『法華宗全書』二五四頁・二五五頁)。
- (29) 『宗要集』 第五卷三五九頁。

- (30) 『宗要集』第五卷三七五頁。
- (31) 『観心本尊抄』(定本遺文七一九頁)。
- (32) 『宗要集』第五卷三六四頁。「草木成仏とは、事に発心修行して成仏すと云うか」の算題にたいする回答中に見られる。
- (33) 『宗要集』第五卷三五九頁。
- (34) 『宗要集』第五卷三五九頁。
- (35) 『宗要集』第五卷三七五頁。
- (36) 『宗要集』第五卷三七六頁。
- (37) 『宗要集』第五卷三六四頁。
- (38) 『宗要集』第五卷三六四頁。
- (39) 『隆全』第八卷一二七頁。
- (40) 『宗要集』第五卷二七八頁。
- (41) 『宗要集』第五卷二七九頁。
- (42) 『宗要集』第五卷二七九頁。
- (43) 『宗要集』第五卷二七九頁。
- (44) 『宗要集』第五卷三八一頁。

〈キーワード〉

草木成仏

依正不二

上行付囑

末法下種

開眼供養

『開述頭本宗要集』における草木表現に関する一考察